

性能も高まります。

また、アルコールをきつかけとして、覚せい剤や大麻などの薬物に手を出す未成年者が多いことから、アルコールは非行への入り口という意味で、ゲートウェイ・ドラッグと呼ばれるています(図4)。

●● 未成年者の脳は、飲酒後の不快を感じにくい

ここで興味深い報告を紹介しましょう。動物での実験結果から、未成年者と大人とでは飲酒したときの感じ方が違うということがいわれています。大人の場合、適正な量の飲酒をすると脳の抑制がとれて明らかにったり、気持ちが悪くなったりというお酒の良い面があらわれる一方で、酒量が多くなると今度は気分が悪くなったり、運動機能が低下したりといったお酒の悪い面が出はじめる、飲み過ぎれば翌日には二日酔いとなってしまいます。ところが、未成年者の場合は脳のアルコールに対する感受性が大人と異なり、良い面を感じやすく、悪い面は感じにくいのです。例えば、飲酒しても気持ちが悪くなりやすいですし、また二日酔いにもなりにくいのです。このことが、未成年者の飲酒(特に大量飲酒)をさらに促進させる要因にな

っているといえるでしょう。しかしながら、未成年者の身体は大人に比べてアルコールに弱いいため、実際には身体はひどくダメージを受けていますし、危険な状態に陥る酒量も大人よりも少ないのです。

●● 未成年者飲酒防止に向けて

未成年者飲酒防止の取り組みは、一筋縄ではいきません。なぜなら、社会的要因や身体的要因などの様々な要因が複雑に絡み合ったなかから未成年者飲酒問題が存在しているからです。とはいえ、根絶させる必要があることは明白であり、そのためには3つの柱が重要と考えています。まず1つ目は「家庭」です。未成年者が飲酒する機会として最も多いのは、冠婚葬祭や家族との食事のときなのです。残念なことに、親や親戚などの大人たちが軽い気持ちで子どもたちに飲酒をすすめてしまうことが多いのが実情です。まずは両親が子どもにお酒をすすめないこと、そして飲酒しないよう教育することが重要です。そしてさらに、親子で十分なコミュニケーションをとることも非常に大事です。

2つ目の柱は「学校」です。健康教育として、未成年者飲酒についての授

業が学校でも徐々に行われるようになってきていますが、この取り組みをさらに充実させる必要があります。また、教師が生徒に教育することに加えて、子ども同士の関係も重要です。友人や仲間との健全な関係を築くことが、飲酒を遠ざける道になるでしょう。様々な学校での活動に加えて、放課後に外で遊んだり、スポーツをしたり、そのときにしかできないことを楽しむなかで、健康的な人間関係をつくるのが大切です。

3つ目の柱が「社会」です。未成年者飲酒防止に向けた取り組みが盛んになり、社会的機運も高まってきているとはいえ、まだまだ寛容な部分があると感じています。未成年者にお酒を売らないだけでなく、飲酒をしている未成年者を見たら、注意することも必要です。そして、「子どもは大人を見ている」ということを念頭におき、大人の方々にはまずわが身を振り返っていただきたいと思います。未成年者の飲酒を防止していくためには、まず大人が自分の飲酒問題を改めること、そして未成年者が飲酒をしてはいけない理由などについての正しい知識を持つことが必要であると感じています。

●● 飲まないことがかっこいいという意識を

若者たちが少なからず抱いている、「飲酒はかっこいい」、「飲酒は大人っぽい」といったゆがんだ認識をなくしていきたいと私自身は考えています。未成年者は無限の可能性を秘めていますし、正しい努力をすれば夢や希望もかなうはずですが、飲酒のために人生の貴重な時間を浪費し、自分の可能性をつぶしてしまふことは非常にもったいないと思います。どんな人にも、生きていけばつらいことや苦しいことはたくさんありますが、「飲酒で現実逃避をするのではなく、困難に立ち向かい一生懸命努力する姿こそが真にかっこいい」、ということ未成年者には伝えていきたいと思っています。ましてや、飲酒運転での死傷事故や飲酒による暴力などのニュースをみると、大量に飲酒をすることや、お酒だけを頼りに生きていくことがかっこいいとは、到底いえるはずはありません。多量の飲酒によって病気や事故・暴力などの飲酒問題が起こること、未成年者飲酒は後で取り返しのつかない問題になることを理解させ、「特に未成年者は、お酒を飲まないことがかっこいい生き方である」という認識を定着させていきたいと考えています。